

## 芸術情報学部における英語教育（１）：音楽応用学科の場合

### English-language education at the Department of Music Business Development

八木 慶太郎  
YAGI, KEITARO

#### [抄録]

筆者は 2015 年度から主に音楽応用学科と情報表現学科の英語教育を担当しているが、音楽応用学科では音楽ビジネス、情報表現学科ではゲームビジネスに関わる世界的に著名な人物をそれぞれ 1 人取り上げ、これまでの人生や仕事、リアルタイムの活動状況について、1 年間じっくり英語で学ぶ機会を提供することを試みている。

本稿では、音楽応用学科における英語教育について述べる。音楽ビジネスに関わる人物としてテイラー・スウィフトを取り上げることの意義について考究した。学生と年齢が近く、また日本人のファンも数多く存在するテイラー・スウィフトを題材とすることで、学生の動機付けに資することが期待できるだけでなく、音楽応用学科での教育・研究の一領域である音楽ビジネスについて英語で学ぶ機会も同時に提供できるのではないだろうか。このような考えから、テイラー・スウィフトを通して、音楽応用学科ならではの英語教育をどのように構想・展開できるかということについての私見を提示した。

キーワード：英語教育 音楽応用学科 音楽ビジネス テイラー・スウィフト

#### [Abstract]

I have considered the significance of using Taylor Swift as a subject for English-language education at the Department of Music Business Development. Because of her proximity in age to students, and her large number of Japanese fans, studying the music of Taylor Swift could increase students' motivation. It would also offer the opportunity for them to learn, in English, about the music business, one of the education and research areas covered at the Department of Music Business Development. Based on this idea, I have offered some observations on how Taylor Swift could be used as a subject to conceive and develop English-language education in a way that is unique to the Department of Music Business Development.

#### Keywords:

English-language education, music business, Department of Music Business Development, Taylor Swift

## 1. はじめに

大学における英語教育では、各大学、あるいは各学部・学科の特色・特性に鑑みた内容を取り入れることが望まれる。学習指導要領によって目標・内容が規定されている高校までの英語教育とはこの点で一線を画しており、ともすると役に立たないと思われがちな大学での英語教育の存在意義を訴求する上でもこの点が極めて重要である。

筆者は、尚美学園大学での英語教育に2015年度から携わるようになり、主に音楽応用学科と情報表現学科の英語を担当している。音楽応用学科では音楽ビジネス、情報表現学科ではゲームビジネスが教育・研究の主たる対象領域の1つとなっていることに鑑み、これらに関わる内容を題材とした英語教育を構想・展開している。

本稿では、音楽応用学科での英語教育について言及する。筆者は、特に世界的に著名で人気のある同時代のアーティストであるテイラー・スウィフトが音楽応用学科での英語教育の題材として好適なものの1つと考えるに至った。以降では、その所以について述べていくこととしたい。

### 1. テイラー・スウィフトを題材として選定した理由

#### 1.1 実在の人物であり、時事的な話題に事欠かないこと

英語科目に限らず、一般に授業は教員が指定する教科書に基づいて進められることが多いが、授業の進行の過程で当然ながらその教科書ではカバーしきれない時事的な話題も生じてくるので、このような時事的な話題を適宜取り上げることで教科書の内容を補足し、学習者の興味を喚起することが重要且つ有効である。

実在の人物であれば、その活動状況が随時、時事的な話題としてメディアで報道される。さらにその人物がアーティストであれば、その活動の成果物として新しい作品も創作される可能性がある。人気があり、著名なアーティストであれば、最新の作品の内容や発売後の売上動向などの話題が、新聞、雑誌、テレビ、ラジオといったマスメディアをはじめ、アーティストの公式サイトやSNS、さらにはビルボードのような音楽情報サイトなど、様々な情報源から提供されるので、これらを最大限に活用することで、日常的に実際に用いられている多様な英語に数多く接する機会を持つこともできる。また、これらを相互に比較することで同一の話題でも取り上げ方に違いが見られる場合もあることを実感したり、これらに共通して頻出する語句に自然に習熟したりすることもできるだろう。

また、アーティストであれば、インタビューを受ける機会も数多くある。そこでの発言のうち、特に人々の印象に残るようなものは、別途「語録」のような形でまとめられることも多く、このような語録で用いられている英語表現も英語学習には極めて有用と考えられる。

テイラー・スウィフトの場合、2017年は6枚目のアルバム『レピュテーション』の発売という大きな出来事があったため、授業では、6枚目のアルバム発売が噂されるようになってから実際の発売に至るまでの時期のメディアの情報を逐一追っていくことができた。また、それらについての英語・日本語の情報を検証すると、日本語で発信される情報はその数日前に英語で発信された情報をベースにしている場合が多いという点に気付かせることもできた。このように、英語によって、最新の音楽業界の情報を入手・分析するこ

との意義と楽しさを実感させることができれば、英語学習の動機付けになるのは勿論のこと、グローバルな視野を持って後々の音楽ビジネスの学習に臨むこともできるようになるのではないかと考えている。

## 1.2 具体的な作品が存在すること

アーティストには楽曲という形で具体的な作品が存在し、そこで用いられる歌詞は、英語学習の対象としても非常に興味深いものである。ポピュラー音楽では、学校英語ではなかなか取り上げられない俗語や新語、あるいは比喩的な英語が登場することも多いが、テイラー・スウィフトの場合も歌詞の英語をじっくり検証していくと、より深い作品世界の理解に到達できることが多い。これは、英語で書かれた作品の文化的側面の学習ということにもなり、このような作品は異文化理解に資する教材としても活用し得るものと考えられる。

## 1.3 出身地や活動の拠点となる地域についての理解も深められること

もとより英語の授業で用いる題材としては、外国の特定の地域それ自体が取り上げられることも多い。また、ある特定の人物が題材となっている場合も、ほぼ必然的にその人物の出身地や活動の拠点となる地域についての言及が行われることになる。

テイラー・スウィフトはアメリカ人で、ペンシルバニア州のワイオミッシングが出身地であるが、13歳の時に一家で転居し、活動の拠点をテネシー州のナッシュビルに定めた。現在はポップスの歌手と捉えられることが多いが、もともとはカントリーミュージックの歌手になることを志していたためである。このナッシュビルという地域は、「ミュージック・シティ」の異名を持ち、特に大手レーベルや音楽出版社が集積する界隈は「ミュージック・ロウ」と称されていて、カントリーミュージックの聖地としても名高い場所である。その象徴的な存在となっている施設が「カントリーミュージック殿堂博物館」であり、館内にはテイラー・スウィフトの寄付（400万ドル）で2013年に設立された音楽教育機関「テイラー・スウィフト・エデュケーションセンター」もある。その一方で、最近ではブリヂストンなど日本の企業も多く進出しているため、日本人も多く居住するようになったという点でも注目に値する地域である。

2017年10月に合計4回、TBSテレビの「ふるさとの夢」という30分番組でこのナッシュビルが特集されていた。多くの日本人には馴染みの薄い、上述のようなナッシュビルの地域特性やカントリーミュージックというジャンルについて視聴覚的に理解を深められる内容で大変有用であり、学生からも好評を得ることができた。

2017年度は、上述のように新しいアルバムの発売に伴う様々なメディアからの情報とこの番組の活用によって、補助教材の充実化を図ることができた。補助教材として活用できる情報源が豊富に存在する対象を題材とすることには大きな利点があると考えられる。

## 1.4 学生と年齢が近いこと

実在の人物を扱う場合、学生が興味を持てる対象であるかということが大きなポイントとなるであろう。テイラー・スウィフトは、1989年12月生まれで現在、28歳になったばかりという若手のアーティストである。世界的に著名で大きな観客動員力を有する存在で

ありながら、学生と年齢が近く、また日本人のファンも 10 代後半から 20 代にかけての年齢層が多いことから、彼女の楽曲や生き方に興味を持つ学生も潜在的に多く存在することが見込まれる。それゆえ、彼女の楽曲や生き方の背景をなす様々なエピソードに英語で触れる機会を提供することは、英語学習への興味を喚起する一助となるものと考えられる。

### 1.5 英語で書かれた読み物が多く存在していること

日本の大学英語教科書でテイラー・スウィフトについて詳しく取り上げているものは現時点ではまだ見られないが、海外の出版社からは英語圏の子ども向けの読み物としてテイラー・スウィフトを取り上げた児童書が既に数多く刊行されている。

このような児童書に共通して見られる利点としては、①平易な英語で書かれていること、②フルカラーでイラスト・写真も豊富に掲載されていること、③ページ数も少なめで読了の達成感を味わいやすいこと、などがあげられる。加えて、内容の充実している「本物」の英語の本を用いることで、英語での「読書」の楽しさを味わうことも企図している。尚美学園大学では英語での多読が奨励されており、メディアセンターにも多数の英語多読用の読み物が所蔵されていることを意識したためである。筆者が用いている本もこのような「英文読本」として、メディアセンターでは多読図書仕様の請求記号が付与されている。

ちなみに、筆者は、Ryals, Lexi, *When I Grow Up: Taylor Swift*. New York, Scholastic, 2015. を用いている。30 ページ程度で 1 年間で扱うのにちょうど良い分量であり、生誕から 5 枚目のアルバム『1989』の時期までの主要な出来事が一通りカバーされているためである。勿論、本書に出てこない話題も多くあるが、それらについては上述の補助教材を多用して補っている。

### 1.6 音楽ビジネスについての学習に資するエピソードに富んでいること

音楽ビジネスについて本格的に学ぶには、日本だけでなく外国、特にアメリカの音楽ビジネス事情・慣行や動向にも注目しておきたいところである。

テイラー・スウィフトのこれまでの活動には、音楽ビジネスについての学習に資するエピソードも数多く含まれている。筆者は上述のテイラー・スウィフトについての読み物を用いて、通年にわたりテイラー・スウィフトに特化した内容の授業を行っているが、数回の授業でこれらのエピソードのみを適宜取り上げるということも有益であろう。

以降では、節を改めて、音楽ビジネスについての学習に資するエピソードの例をいくつか例示してみることにする。

## 2. テイラー・スウィフトに学ぶ音楽ビジネス

### 2.1 *Wall Street Journal* への寄稿

テイラー・スウィフトは、2014 年 7 月、*Wall Street Journal* に "For Taylor Swift, the Future of Music Is a Love Story" という音楽産業への提言の記事を寄稿し、大きな話題を呼んだことがある。

そこでは、多くの人が音楽業界の売上減少を懸念している中で、音楽が「アート」としてとても重要で稀少で価値があり、価値のあるものにはそれに見合う対価が支払われるべきであるということや、自身の特徴であるファンとの密な交流による関係性の構築につい

での意見などが述べられている。そこでの "Music is art, and art is important and rare."<sup>1)</sup> という英文は非常にシンプルな英語でありながら、それだけに説得的でもあり、これは芸術情報学部のキャッチフレーズとしても使えそうな言い回しではないだろうか。このような良質の英文に数多く触れることで、音楽応用学科の学生の英語力や言語的な感性が磨かれていくことを筆者としては期待しているところである。

## 2.2 演奏経験の蓄積とデモテープ作り、ショーケース出演

ワイズマン (2001) の冒頭には、読者を中都市に住んでいるシンガー・ソングライターと仮定して、音楽業界に踏み出すためには、どのような取り組みが必要かということが述べられており、そこではできる限り演奏経験を積み重ねること、デモテープを作ること、そしてレコーディングとアーティストの本拠地である大都市に移った後にはソングライターの「ショーケース」を行っているクラブを探してみるなど、などがあげられている<sup>2)</sup>。

テイラー・スウィフトは、本書に書かれているような理想のシンガー・ソングライター志望者像をほぼ忠実に体現している。10 歳頃から観客の前で歌える場所を自ら探索するようになり、ソングライティングやデモテープ作りもその頃から始めてスポーツイベントでの国歌斉唱などを 11 歳という年齢で果たした。また、その後、ナッシュビルの「ブルーバード・カフェ」でのショーケースを契機として、ユニバーサル出身でインディーズのレーベル、ビッグマシーンレコードを興したスコット・ボルチェッタとの運命的な出会いを果たしたことも人生上の大きな出来事である。

## 2.3 寄付活動

音楽ビジネスに関わる人物の社会貢献的な活動に注目することも、音楽ビジネスの学習上有益且つ重要であろう。テイラー・スウィフトは次世代の教育に対する熱意も持っており、先述の通り、「テイラー・スウィフト・エデュケーションセンター」の設立に際して 400 万ドルを寄付し、2014 年にはそこで小学生にソングライティングの指導を行っていた。また、先述のような読み物を複数刊行している児童書出版社のスカラスティック社と共同で「リーチアウト・アンド・リード」というキャンペーンを行い、ペンシルバニア州の病院に 2000 冊を寄付したこともある。

## 2.4 ストリーミングサービスへの抵抗

テイラー・スウィフトは、ストリーミングサービスのスポティファイやアップル・ミュージックに新曲の提供を断っていたことがある。これは音楽のアーティストには正当な対価が支払われるべきであるという上述の寄稿文でも主張されていた考え方に基づいており、特に後者については、ユーザーの 3 か月無料登録期間中にアーティストへの支払いが行われないという規定に異議を唱えて、経済的に重大な影響を受けかねない若手のアーティストを守ろうとしたことが動機とされている。

ちなみに、テイラー・スウィフトは最新アルバム「レピュテーション」でも、発売当初はストリーミングでのフル視聴を制限していた。このこともあってか、このアルバムは 2017 年で唯一、パッケージメディアのみで 100 万枚以上の売上という記録を達成したということは特筆に値する。

このようなエピソードは、音楽応用学科で取り上げるトピックとして、特に重要なものであるはずである。このようなエピソードに基づいて、テイラー・スウィフトの音楽（ビジネス）観や配信サービスについての考え方への賛否、日本とアメリカのストリーミングサービスの普及度の違い、日本では40歳で引退を発表した安室奈美恵のアルバムがずっと1位を独占し、テイラー・スウィフトのアルバムがその記録を超えることができなかった理由、などについて、ゆくゆくは音楽応用学科の学生ならではの意見を曲がりなりにも英語で表現できるようになることを期待したいところである。実際の学生の英語力に鑑みると、これはなかなか困難な課題ではあるが、少なくともそのための基礎的な英語力は培うことができるよう、今後も努めていきたいと考えている。

## おわりに

一般に、特定の1人の人物のみを重点的に取り上げる授業というのは、学科の特に標準的な、あるいは必須の指導項目が予め想定されていることが多い講義形式の専門科目では、なかなか実現しにくいものなのではないかと推察される。その点、英語科目の場合は、指導項目は予め明確に決まっておらず、各教員の裁量で内容を構想できる自由度が高いため、このように専門科目では十分に時間をかけて取り上げることはできないトピック、あるいは専門科目で取り上げる中心的なトピックとはなりにくい、専門科目に関わる内容として学生が知っておくとよいような周辺的なトピックを取り上げ、専門科目とは異なる視点から専門に関わる内容を扱うことができる余地があるといえる。大学英語教育界では、このような側面について言及されることがあまりないが、このような側面も、大学英語教育の存在意義の1つとしてもっと重視されてよい側面なのではないかと筆者は考えている。

尚美学園大学芸術情報学部音楽応用学科の大きな特色は、音楽ビジネス、あるいはポピュラー音楽が教育・研究の重要な対象領域として明確に位置づけられているという点にあるといえよう。このような領域について重点的に学べる大学は日本ではまだ多いとはいえないからである。本稿は、テイラー・スウィフトを音楽応用学科の英語科目で扱うことの意義が、このような特色から導き出されるものであるということを示したものである。

なお、筆者は情報表現学科でも特定の1人の人物を題材とした授業を行っているが、ここでの対象は日本人である。アメリカ人を対象としている音楽応用学科の場合と対照的に、ある日本人の人生と仕事について英語で学ぶということを試みている。次号では、この両学科でのアプローチの違いと、両学科での英語教育に共通する英語教育学上の知見について言及することとしたい。

## 引用文献

- 1) Swift, Taylor, "For Taylor Swift, the Future of Music Is a Love Story".  
*Wall Street Journal*, July 7 2014.  
<https://www.wsj.com/articles/for-taylor-swift-the-future-of-music-is-a-love-story-1404763219> (accessed 2018-01-30)
- 2) ワイズマン,D.『音楽ビジネスをめざす人のためのアメリカン・ミュージック・ビジネス』関根直樹訳、音楽之友社、2001年、17-20頁。